

## 紀伊大島実験所 一般公開 開催レポート

2025年11月3日(月・祝)、京都大学紀伊大島実験所では、京大ウィークス2025の一環として、一般公開イベント「本州最南端部の環境を学ぼう」を実施しました。今回が初の一般公開です。地元の方々を中心に24名が参加され、伊勢武史所長による解説に熱心に耳を傾けておられました(多数のお申し込みをいただきありがとうございました。抽選に漏れた方は、ぜひ次回の開催をご期待ください)。





当日は、近畿地方で木枯らし1号が観測されるなど風の強い日でしたが、参加者の皆さんは集合時間前に全員が揃うほど意欲的にご参加いただきました。

国道沿いの門前から建物までの約300mは、スダジイなど特徴ある植物の説明を受け観察しながらゆっくりと歩いて移動。

以前、栽培されていた樺や梅などの低木植物が、他の植物が勢力を伸ばしてゆくことで太陽光が届かなくなり生育が滞り、退化していくことの説明を受け、太陽の大切さを実感されたのではないのでしょうか。

実験所を取り巻く黒潮等の影響を受ける温暖な気候が育む植生に、驚きの声が上がっていました。



講義室では、研究所のあゆみや今後の活用方針を解説。赤外線カメラがとらえた夜間の野生動物(イノシシやアナグマ)の映像も紹介され、実験所の森に息づく多様な生態系を感じ取っていただけたのではないのでしょうか。



続いて、敷地奥の原生林へ向かいました。かつて柑橘類や海外由来の樹木の試験栽培が行われていたフィールドは、現在は常駐研究者が不在となり、自然林へ回帰が進んでいます。圃場跡地を覆う木々や多様な植生を観察する一方で、セイタカアワダチソウなど外来種の侵入も確認されました。環境管理の重要性について、参加者との対話も深まりました。

参加者からは、「前を通るたび気になっていたので参加できてよかった」「小学校の遠足以来で懐かしい」などの声が寄せられました。また、「学校帰りに実験所内のミカンを食べた」という地元ならではの思い出話も聞かれ、研究所が地域にとって長年近い存在であったことがうかがえました。

紀伊大島実験所では、今年から学生実習が再開しています。今後も地域と連携しながら、教育・研究のフィールドとして活用の幅を広げていきます。引き続き、多くの皆様のご参加をお待ちしています。